

冬のちよう

小川未明

青空文庫

すがすがしい天気てんきで、青々あおあおと大空おおぞらは晴はれていましたが、その奥底おくそこに、光ひかった冷つめたい目めがじつと地上ちじょうをのぞいているような日ひでした。

美しい女めちようは、自分じぶんの卵たまごをどこに産うんだらいいかと惑まどっているふうでありました。なるたけ暖あたたかな、安あんぜん全ぜんな場所ばしょを探さがしていたのです。

もう、季節きせつは秋あきの半なかばだったからです。その卵たまごが孵ふ化かして一ひ匹びつの虫むしとなつて、体からだに自分じぶんのような美うつくしい羽はねがはえて自由じゆうにあたりを飛とべるようになるには、かなりの日にっすう数すうがなければならぬからでした。

「ああ、かわいそうに、こんな時分に生まれてこなければよかつたのに……。」といつて、女ちようはまだ見ない子供のことを憂えたのでありました。

彼女かのじよは、さらに、そのような心配しんぱいをしなくてはならぬ、自分ぶんをも不幸ふこうに考えたのでありました。

「なぜ、私は、もつと日の長い、そしていろいろの花はながたくさんに咲さいている時じぶん分に、この世よの中なかへ生まれてこなかつたのだろう。」と、思おもわずにいられたのでした。

どこか、庭にわの捨すて石いしの下したからはい出てきた、がまがえるが、日ひあたりのいい、土手どての草くさの上うえに控ひかえて、哲てつ学がく者しや然ぜんと瞑めい想そうにふけていました。が、たまたま頭あたまが上うえへ飛とんできた、女めちようの

ひとりごとをきくと、目をぱつちりと開けて、大きな口で話しかけました。

「そのころの世の中のことなら、私がよく知っている。話してきかせるから、木の葉にとまってすこし休みなさい。」

女ちようは、びつくりしました。そこにいて、さつきから獲物をねらっていた、恐ろしい怪物に気がつかなかったのです。

「私は、おまえをとろうとは思っていない。私は、いまなにもたべたくない。静かに、昔のことを思っていたのだ。春から夏にかけては、私たち、生物は、だれもかれも幸福なものだった。それから見れば、いまのものは、かわいそうだと思ふよ。」

こうがまがえるがいったので女ちようは、自分に同情して

くれるものと思つて、立ち上がったのを、引き返してきて、かたわらの一つの葉の上に止まりました。

「後生ですから、私のお母さんや、お父さんたちの、黄金時代のことを話してください。きくだけでも、生まれてきたかいがありますから。」と、彼女は、頼みました。

「それは、野にも、山にも、圃にも、花という花はあつたし、やんわりとした空気には、甘い香りがただよつていた。鳥が鳴き、流れがささやき、風さえうたうのだから音楽がいたるところできかれたものだ。それは、このごろの悲しい歌とちがつて力のあふれたものだった。おまえさんたちの知らない、いろんなちようを見たまよ。おまえさんが、美しくないというのでは、けつしてな

いが、それは、美しいちようがたくさん飛んでいた。人間は、花よりも、かえつて、ちようちようといつて、ほめそやしたものだ。ちよつとおおげさだが、空中いつぱいちようだといつてよかつたんだ。」

「まあ、そんなに、私たち、ちようばかりだったのですか。そして、そんなに、人間に愛されたのですか。」と、女ちようは目をまわすばかりおどろきました。

すると、がまがえるは、冷静な調子で、語りつづけました。「おまえさんは、どう思う。そんなにちようがたくさんいて、どの圃にも、どの花壇にも、いつぱいで、みつを吸うばかりでなく卵を産みつけたとしたら。たちまち、若木は坊主となり、野菜の

葉は、穴だらけになつてしまふ。そんなつてもちようをきれいだ
などというのは、ただふらふらしている遊び人だけで百姓や、ま
た草木をかわいがる人間は、そうはいわない。一滴からだにつ
いたら、死んでしまうような殺虫剤で、朝から晩まで、ちよ
うの後を追いまわしたものだ。おまえのお母さんや、おまえさん
が、子供の時分に殺されなかつたのは、よほど、運がよかつたの
だ。」

これをきくと、女ちようは、本能的に、くもをおそれ、人間
間をおそれたことが、まちがいでなかつたのを悟りました。そ
して、さらに、なんとなく無気味に感じたので、がまがえるから
も遠くはなれて飛び去つたのです。

彼女の庭のすみにあつて、日当たりのいいからたちの木を
 撰びました。そこには、鋭い無数の刺があつて、外からの敵を守
 つてくれるであろうし、そのやわらかな若葉は卵が孵化して幼
 虫となつたときの食物となるであろうと考えたからでした。
 彼女は、子供に対する最後の義務を終えたのでありました。
 そして、子供らの将来の幸福をねがうように、からたちの
 木のいただきを三、四へんもひらひらと舞うと、あだかもあらし
 に吹かれる落ち葉のように、女ちようの姿は、青空のかなたへ
 と消えていったのであります。

秋草の乱れた、野原にまで、女ちようは一気に飛んでくると
 気がゆるんで、一本の野菊の花にとまって休みました。

このうす紫^{むらさき}色の^{いろ}の、花^{はな}の放^{はな}つ高^{たか}い香^{こう}気^きは、なんとなく彼^{かの}女^{じょ}の心^{こころ}を悲^{かな}しませずにいませんでした。

「冬^{ふゆ}を前^{まえ}にして、なんと私^{わたし}たちは、悪^{わる}い時^じ代^{だい}に生^うまれてこなければならなかつたのだらう。」

彼^{かの}女^{じょ}が、こ^かうい^いつてい^いるの^のを、だ^だま^まつてき^きいてい^いた野^の菊^{ぎく}は、

「なんの、まだ季^き節^{せつ}の遅^{おそ}いこと^{こと}があるもの^{もの}ですか。この^{この}よ^ように、

野^のにはいろい^{いろ}ろの花^{はな}が咲^さいてい^いるではありませ^{せん}か。この^{この}あ^あいだ

こ^ここへや^やつてき^きた緑^{みどり}色^{いろ}の蛾^がは、夏^{なつ}のはじ^じめ^めのこ^ころ、なん^{なん}でも

お^おお^おぜ^ぜい^いが群^むれ^れを造^{つく}つて、あ^あの^の国^{こく}境^{きょう}の^の高^{たか}い^い山^{やま}々^{やま}を越^こえて七

十^{じゅう}里^りも、八^{はち}十^{じゅう}里^りも、あ^あち^ちら^らの^の方^{ほう}か^から^ら旅^{たび}を^をし^して^てき^きた^たとい^いつ^つて^ていま^{いま}し

た。ま^まだ冬^{ふゆ}に^になる^るま^まで^でには^はだ^だい^いぶ^ぶ間^まの^のあ^ある^るこ^こと^とです。い^いろ^ろい^いろ^ろお

もしろいことがありますよ。」といって、女ちようをなぐさめる
 とともに、自分で、自分をなぐさめたのでありました。

その翌日は、秋にはめずらしい暖かな日でした。強く射す光
 に、草の葉はきらきらと輝いて、冬などはどこか遠い地平線の
 かなたにしかないと考えられたのです。

このとき、黒く、雲のように、頭の上の空をかすめて飛んでい
 ったものがあります。女ちようは昨日から、この野の中に一夜を
 明かしたのであるが、音のする上を見あげて、渡り鳥にしては小
 さいと思つたので、

「あれは、なんですか。」と、花に向かつて、たずねました。

「あれですか、ばつたの群れが、どこかへ移つてゆくのです。」

と、花は答へました。

どこかに、もつといい土地があるのであろうと、女ちようは考えていました。

その晩の月は、明るかつたのです。そして、地虫は、さながら、春の夜を思わせるように哀れっぽい調子で、唄をうたつていました。

幾たびか、眠られぬままに、からだを動かしていたちようはついに、月の光を浴びながら、どこへとなく、飛び去つてしまいました。

そしてふたたび、彼女の姿は地上に見られなくなりました。うすく霜の降りた、ある寒い朝、からたちの枝の先のところに

しがみついて、金色こんじきの日の光ひのひかりを、ありがたそうに待まっている青あ虫おむしがありました。いじらしくも、そのからだには、わずかに羽はねが生はえかかっているのです。

たまたまかたわらにあつた家いえの窓まどから、顔かおを出だして、これを見みた主人しゅじんは、傷いたましそうに、

「ああ。」と、感かん動どうして、声こえをあげました。なぜなら、彼かれはいまの時代じだいに生うまれてきた、自じ分ぶんの子供こどもたちや、多おほくの子供こどもたちのことについて、考かんえていたときであつたからです。

「かわいそうに、ここう寒さむくては、死しんでしままうだろう。悪わるい時じ節せつに生うまれてきたものだ。野のにも、圃たんぼにも、花はなと光ひかりがないごとく、この社しゃ会かいにも、自じ由ゆうと空くう想そうと芸げい術じゆつが滅ほろびたのだから。」

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「民政」

1934（昭和9）年1月

※表題は底本では、「冬《ふゆ》のちよう」となっています。

※初出時の表題は「冬の蝶」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年5月6日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

冬のちよう

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>